

# POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第7号 1989. 7. 4

発行

北海道ポーランド文化協会  
〒060 札幌市中央区北2西2  
道特会館 N D A 画廊内  
電話 221-8672

## リレー随筆

### 我が心のポーランド

霜田 千代磨

「ただちにヴロツワ市に來られたし。待っている。グロトフスキー」。

オーストリアのウィーン駅から発信されたその電報を私が手にしたのは一九八二年六月末日の事である。

一週間後の七月八日、西ドイツのフランクフルト中央駅からワルシャワ行きの国際列車に乗り込んだ私は、丸二年ぶりにポーランドの国境を越えた。

私が初めてポーランドへ留学した一九七二年は、札幌冬季オリンピックの年。奇しくも、その時の九十メートル級ジャンプ競技において、ポーランドから参加したフォルトナ選手が百十一メートルを跳んで優勝した年であった。

一九八〇年に、ウッジ大学付属の外国人のためのポーランド語学校に在学した私は、その次の年、ポーランドの西南部シロンスク県の首都ヴロツワ市（人口七十万）にある世界的に有名な前衛演劇運動の推進者

グロトフスキーの主宰する実験劇場の試験を受けた。

希望者が多く二百人近く受験した中で、米国二、フランス一、デンマーク一、西ドイツ一、オランダ一、日本一、の七人が実験劇場で仕事をする事を許された。そのうち女性は米国のマージン一人、日本人では私が初めてであった。

正式な名称を「俳優研究所実験劇場」といい、ポーランド政府高等文化芸術省直轄の研究所である。したがって、ここで仕事をする人間にはポーランド政府から奨学金が支給され、政府招待者となる。

以後、私とポーランドとの縁（えにし）は切れず、実験劇場の仕事に携わってから丸九年の歳月が経った。なぜ、かくまで身体的にも精神的にもきつく過酷な実験劇場を私は必要としたのか？それは私が仏教の勉強をしている浄土真宗の僧侶であり、現に田舎の寺の副住職であるという

ことと密接に結びついている。僧侶といえども、日常生活に流され、埋没し、世間的な追従と虚偽の中に安住せんとする。そんな自分にとって、真に厳しい自己との闘いの場が欲しかったのである。空気、大地、水、光などの自然との触れ合い、あるいは言語、民族、文化、宗教を異にした外国人との共同生活、一つの研究テーマを目的とした身体を通じた理解と、具体的な修行の場がポーランドのグロトフスキーによって私に与えられたのである。

今回の仕事は一九八〇年からグロトフスキーが中心となり、継続して実践追求している『演劇の源泉』という課題を目的としたプロジェクトに対する参加である。

グロトフスキーの思想の中には、「人間は民族、言語、宗教、文化の違いを越えて互いに共通の問題について、理解する事ができる」という考えがある。

森の中の小屋という、社会生活と断された場所（空間）において、グループの人間が生活を共にし、自然のもろもろのエネルギ（力）を媒介として、一つの研究課題を身体を通して理解することができ。これがグロトフスキーのアクティブ・カルチャー（行動的、積極的文化）という理論である。その具体的な研

究課題の一つが今回のプロジェクトであった。

参加した基本グループのメンバーは、コロンビア人、メキシコ人各一、インド人（ベングル人）、ポーランド人各二、それに日本人の私を含めて七人であった。以上の参加者は一九八〇年の第一次『演劇の源泉』プロジェクト以降の基本グループのメンバーであり、一九八一年八月よりポーランドで、また一九八二年一月より六月までイタリアにおいてこの研究課題と取り組んできた顔なじみである。

このことから理解できるように『演劇の源泉』プロジェクトとは、単なる演劇のためのワークショップではなくして、人間が日常生活を営んでいく上での『人間の本質にかかわる基本的な動作』という事ができるかと思う。仏教のことばでいう「行・住・座・臥」である。それは、起きて、顔を洗って、食べて、座って、眠って、廁（かわや）へ行って、という動作（行為）の内容である。

森の中という人間の源泉を呼びもどす環境（空間）の中で生活する事により、人間の源泉に根ざしたトレーニング（訓練）を行う。日常生活とトレーニングとは同じリズム（波長）で行われる。

課題の目的をもう少し具体的に説

明すると

(イ) 日常生活の基本的にして、重要な動作（行為）でなければならぬ。

(ロ) 非常に単純な動作でなければならぬ（例、歩く）。

(ハ) 整息と一体化した内観と聴事である。

つまり、日常生活とトレーニングは互いにかい離し、断絶した異質のものであってはならないということである。物質文明と現代生活の中で衰弱した人間の生命（精神）の回復と新生をはかる。森の中で身につけたものや身体を通して理解したものを、また普段の社会生活の中に持ち帰り、持続させ継続させていく。

人間とうまれて、人間として生き、人間として死んでいくという「人間の源泉」を明らかにしていく立場が宗教としての仏教であり、真宗であるといえる。

『歩く』とは、人間が生きていく上での基本的な行為である。それは一人の人間のファイナル（終末・死）までの平凡にみえて重要な行為である。一人の人間が一定の自然リズムで歩くという訓練を『強い・緩りかえし・さとる』システムを「演劇の源泉」の課題にすることにによって、グロトフスキーは『歩く』という行為の中に、人間が『生きる』と

いう事の意味を深く考えているように見える。まぎれもなく『歩く』という行為は、連続無窮（きゅう）にして人生（日常生活）を貫いているものである。従って実験劇場で彼が

行っている「演劇の源泉」プロジェクトは、宗教的な内容に深くせまったものである。  
（元グロトフスキー実験劇場研究生、空知管内北村浄土寺住職）

### 博文協例会（第七回）

ヤドヴィガ・ロドヴィチ氏の

## ポーランドの演劇（仮題）

●ヤドヴィガロドヴィチ氏（女性）は、ポーランドの劇団『ガルデニーツェ』の主催者です。この劇団は、すでに欧米で何回も公演しているだけではなく、昨年のソウル・オリンピック記念国際文化祭にも招待され、国際的によく知られています。

【日時（予定）】 一九八九年八月二十六日（土）

または九月二日（土）

【場所（予定）】 国際交流プラザ（入場無料）

※講演はロドヴィチ氏自身の日本語で行う予定です。氏はワルシャワ大学日本学料の非常勤講師もされています。詳しくは本協会事務局、または灰谷（〇一七二六二一一）内線四〇九〇）までお問合せ下さい。

## 大作家ブルスについて

灰谷 慶 三

ボレスワフ・ブルス（一八四七—一九一三）は、ポーランドで初のノーベル文学賞を受賞したシェンキェヴィチを並んで、十九世紀の年代から今世紀初頭にかけてのポーランド文学を代表する大作家であります。

ブルスは、落ちぶれた小貴族の家に生まれ、大学中退後、様々の職業を経験してから作家生活に入りました。初期の作品は機知に富んだユーモア小説が主体でしたが、やがて社会問題に対する関心を深めて行きます。当時のポーランドは、ロシア・プロシア・オーストリアの三国によって分割支配されて独立を失っており、政治的、経済的、社会的に極めて困難な状況にありました。

ブルスは、「芸術は実生活の新しい諸特徴を明らかにするものであるべきだ」との立場から、ポーランド社会を冷静かつ客観的に描こうとしました。そうした彼の最大の代表作が長編小説『人形』であります。

ボレスワフ・ブルス（一八四七—一九一三）は、ポーランドで初のノーベル文学賞を受賞したシェンキェヴィチを並んで、十九世紀の年代から今世紀初頭にかけてのポーランド文学を代表する大作家であります。

ブルスは、落ちぶれた小貴族の家に生まれ、大学中退後、様々の職業を経験してから作家生活に入りました。初期の作品は機知に富んだユーモア小説が主体でしたが、やがて社会問題に対する関心を深めて行きます。当時のポーランドは、ロシア・プロシア・オーストリアの三国によって分割支配されて独立を失っており、政治的、経済的、社会的に極めて困難な状況にありました。

ブルスは、「芸術は実生活の新しい諸特徴を明らかにするものであるべきだ」との立場から、ポーランド社会を冷静かつ客観的に描こうとしました。そうした彼の最大の代表作が長編小説『人形』であります。

## ポ文協例会（第八回）

### ポーランド映画の世界

ブルス原作

ハス監督

## 人形

●「ポーランド映画の世界」の第二弾として、ポーランドの大作家ブルス原作、「砂時計」の巨匠ヴォイチェフ・ハス監督の「人形」の上映会を行います。

●この映画は一九八七年に日本に輸入され、自主上映団体の手で上映されたことがあります。一般の映画館では上映されたことがありません。

●一九六八年ポーランド映画。カラー。シネマスコープ。上映時間二時間四五分。一九六九年パナマ国際映画祭グランプリ受賞。シネマテーク・ジャポネーズ配給。

【日時】一九八九年九月三十日（土）午後一時頃から  
数回（詳細未定）

【場所】JABBパート2

（札幌市中央区南八四大京観光ビル地下）

【整理券】前売り五百円、当日七百円

【共催】北海道ポーランド文化協会

イメージ・ガレリオ

※詳しくは本協会事務局、または小笠原（電話七二六一  
二二一一内線六七四八）までお問合わせください。

かなり前から家内と日本への旅について話しあっていた。いろいろな本を読んだり、経験のある知人に聞いたり、最近テレビでよく放映されるようになった日本映画を見たりした。だから理論的には日本で何がわれわれを待ち受けているか、とくに日常生活の違いがどんなものかを知っていた。また、日本では誰も礼儀正しく、正直なことで、忘れ物が一週間路上にころがっていても誰も持ち去ろうとしないことなども知っていた。

われわれはまず札幌からの手紙で、役所での手続きの手間を少なくする方法について知らせを受けた。日本との最初の会いは大使館であった。たしかに日本人は礼儀正しいという伝説を裏付けるものであった。ただ、決定が出るまでに何週間も待たなければならなかった。その間に航空券を買っておく必要があったが、ビザが遅れたので一時は秋まで出国できないという事態になった。飛行機が何ヶ月も先まで満席だったのである。しかし、結局はなにもかもうまく具合に運んで、きちんと期限通りにビザが出たし、航空券も買えた。日本の役所はゆっくりとはあるが、過ちなく動くようだ。こうしてわれわれは日本にやってきた。

第一印象は、われわれがまったく

の文盲だということ。あちこちに図形芸術の作品のように見える看板がかかっているが、われわれには何のこともやら分らない。英語や国際的な標識は、飛行場以外ではあまり見かけない。

次に、店や通りで意思を疎通するのが必ずしも容易ではないことが分かった。なぜなら外国語の知識はワルシャワよりもよいとはいえないからである。状況を救ってくれるのは、日本人の礼儀正しさで、これは間違

な機器の扱い方を記した手引きである。おそらくこれも外国人の生活を楽にしてやろうという願いの結果であろう。それは一挙手一投足ごとに感じられる。

とりあえず、ちょっと町を歩いて眺めてみる。小さな家庭菜園は手入れが行き届いていて、樹木の葉や花が色鮮やかできれいだ。ときどき見かける和服姿の人や芸術作品に驚く尊敬を呼び起こすのは、日常生活に多くの伝統的な習慣が保存されている

## 札幌滞在ー最初の一週間

### イエージ・トマシエフスキ

いない。すでに地下鉄切符の自動販売機の扱いを誤ったことがある。駅員は日本語以外何語も解さない風であったが、一見複雑そうな問題もまるで子供の不始末のように簡単に落着いた。おそらく経験から、外国から来た者はだんだんとさまざまな設備に慣れてゆくのだから、がんぜな子供のように扱わなければならないことだろう。また、たいへん役にたったのはアパートにあった日常生活に欠かせないいろいろ

ることだ。そうした習慣にようやく

いまお目にかかっているが、見たところ近代性と矛盾していないようだ。また、多くのけっして贅沢ではない日用品も芸術的な造形と何よりも高い品質への明らかな配慮の跡をどこにみている。ただ、建築だけはどうもいただけない。少なくとも自分がいま住んでいる地区の建築は。

外国人は日本の食事に慣れるのに苦労する、洋食には滅多にお目にかかれなると聞いたことがある。事実

は逆だ。そんな一様性は見あたらない。自分の慣れた食生活を守るのに大して苦労はいらない。しかし、私はずいとも自分の食生活を守らなければならないとは思わない。

大きな印象を残したのは、六月三日土曜日のキャンパスでの学生との出会いである（この日は北大の学園祭であったー訳者）。学生はわれわれを暖かくテント店に引き入れてくれた。そこではさまざまな馳走が用意されていた。われわれはテント店の一つに入って、テーブルについて。回りには笑顔の若者たちの集まりができた。学生はいちばん英語ができる仲間を派遣してきたり、自分たちの間で質問を打ち合わせたりした。集まりは結局記念撮影で終わった。われわれにとっても気持ちのよい雰囲気の中で札幌での第一週が終わった。

もちろん、一週間は余りにも短く、いくつかな問題を見逃しているだろうし、そのなかには大切な問題もあるかも知れない。しかし一週間の滞在だけでも、日本は各種の文献のなかで定着している日本観、あるいはわずか数年前に当地にいたことのある人々の記憶に残る日本観よりも急速に変化しているという結論を出すに十分だろう。今までのところ、自分が考えていたよりもはるかに僅か

の相違にしか気がつかなかった。少なくとも外面的にはそうである。私の目を引いた特徴はとくに尊敬に値する。とりわけ私の念頭にあるのは、人々が見知らぬ者どうしでも日常的な接触において示す善意、とくに子供たちが道であった未知の人に示すほほえみ、また生活の便宜のための数多くの設備、たとえば大きな交差点でメロディーで信号の変化を示す設備などである。

札幌で少しは見当がつくまでには、第一週の影響がどの程度当たっていたか、どの程度速国から言葉も習慣も伝統も知らずにやってきた者の表面的な観察に過ぎなかったかを知るまでには、まだまだ沢山の月日を過ぎなければなるまい。

こういう話がある。その昔、ブラハで賢者として知られたラビが死の床についていた。ユダヤ人の仲間が試煉のときがやってくるものと考え、老いたるラビに自分の人生で得た最大の知恵は何だったかとたずねた。ラビは目を開き、ため息をついて言った。「一つ一つが違ふということだ。」

表面的な判断は頼りにならないものだ。現実はいっている場合はるか複雑であると分かる。けれども、この数日間に観察できた一事だけは変わらぬとどまると確信している。

それは伝統的な振る舞いや礼儀正しさに現われた人々の毎日を仲良く助け合って生きてゆく能力、また無数の些事に現われた美の感覚である。

## 総選挙で

### 「連帯」市民委員会圧勝

伊 東 孝 之

(ワルシャワ大学政治学・新聞学部教授。本年六月より北大スラブ研究センターに十カ月間滞在予定。原文ポーランド語。伊東孝之訳)

六月四日と十八日に行なわれた選挙で、「連帯」市民委員会の推薦を受けた候補者が地滑り的大勝利を収めました。下院では無党派に割り当てられた百六十一議席(三五%)の全議席を市民委員会推薦の候補者が独占し、今回新しく設けられ、完全な自由選挙が行なわれた上院では百議席中九十九議席までを市民委員会候補者が獲得しました。これに対して政府側は全国リスト(指定席)で立候補した国家の最重要指導者三十五人のうち三十三人までが五〇%の得票というハードルを越えることができず、落選しました。

選挙結果をソ連のゴルバチョフ指導部は平静に、むしろ好意的に受けとめています。アメリカ、フランス、イギリスはほとんど熱狂的といつてよい歓迎ぶりを示し、アメリカは十億ドルの、またフランスは一億ドル

の援助を約束しました。西独はやや醒めた見方をしているようです。心穏やかでないのは東欧諸国の共産党政権でしょうが、公式の反応はまだ伝えられていません。

選挙結果は国内のどの勢力にとってもまったく予想外のものでした。事前に国内の中立的な観察者が五つのシナリオを描きましたが、そのうちのもっとも極端なものをさらに極端にした結果となりました。観察者はこれは最悪のシナリオで、政治的不安定と経済的破局を招くこと必定と警告しております。ポーランドの共産党政権は国民の支持がないことが明らかになった後も政権を維持しなければならぬという困った立場に追い込まれるでしょう。「連帯」にとっても状況は必ずしも歓迎すべきものではありません。勝利が伝えられても「連帯」派の新聞に歓喜の

声は少なく、むしろ当惑の色がうかがわれます。ワレサがいうとおり、「連帯」には国民の支持はあっても政権を担当する能力がありません。政権に参加しても野党にとどまっても政府の不人気な政策を支持せざるを得ず、国民の期待を裏切る結果となる恐れがあります。

今度の選挙結果を数字通りに受け取ることは危険です。比例代表制であれば、政府側も上院に四分の一ぐらいの議席を確保できたでしょう。全国リストから立候補した重要指導者は、落選したとはいえ四八%もの票を集めています。他方で「連帯」は同質的な政党ではなく、さまざまな政治勢力の寄せ集めです。ある国内の解説者は、これは「統一野党勢力」だと性格づけています。たまたま現体制への抗議ということで一緒になり、多くの票を獲得しましたが、具体的な問題をめぐって分解する恐れがあります。

今後、ポーランドの政治情勢は大いに流動化することでしょうが、大枠をなすのは選挙の結果というよりも、先の円卓会議での申し合わせだと思われまます。

(北大スラブ研究センター教授)

# ポーランド語

## 講習会に参加して

大井 清美

Dz i e n d o b r y i (こんにちは)。私は毎週火曜日、朝の通勤バッグの中にカセットレコーダーを忍ばせて出勤します。五月から習い始めたポーランド語を録音するためです。

教室ではポーランド人の先生が、

熱心に指導してくださいます。最初は、単語を聞き取るのもやっとの思い。文法も男性名詞、女性名詞、中性名詞とそれに伴うさまざまな変化「あー、悪夢！」それでも、その日の授業が終わると、気分だけは充実感に浸り、利口になった気がするのには不思議なものです。それも束の間、教室を出た瞬間にたった今覚えただけの単語はきれいさっぱり頭の中から消滅しているのです。「あー、残酷！」

私のクラスメイトは大学の先生から主婦の方まで、年齢もさまざまです。七月の初旬で第一回講習会は終わります。次回の講習会でまた皆さ

んと勉強できるのを楽しみにしています。D o z o b a c z e n i a i (またお会いしましょう)

### クシシユトフ・

### ヤヴォンスキ

### ピアノリサイタル

日時 七月七日(金)午後六時

開場、六時三十分開演

場所 札幌市民会館

入場料 一般券五千五百円(消費

税込み)

主催 カワイ音楽振興会

後援 北海道新聞社・日本シヨ

パン協会北海道支部

ヤヴォンスキ氏は一九六五年ワル

シャワの生まれ。一九八五年の第十

一回シヨパン国際コンクールで第三

位に入賞。ポーランドにおける国際

的新進ピアニストとして非常に高い

評価を得ている。

問い合わせは河合楽器北海道支社

(電話〇一一二三一八六六一)

## 博文協主催の行事

楽しく学ぶ

### ポーランド語講習会

#### (第二シリーズ)

●五月から開始された本講習会は、好評のうちに間もなく第二シリーズを終わる予定です。夏休みをはさんで引続き第二シリーズを予定しています。もう一度、基礎から始めますので、初心者の方もふるってご参加ください。

【期間】一九八九年九月五日(火)から毎週一回、計十回

【時間】午後六時三十分から午後八時三十分までの二時間

【会場】クリスチャンセンター(予定)

(住所)札幌市北区北七条西六丁目

(電話)七三六一三三八

【講師】未定

【内容】初級会話と初級文法

【授業料】十回分で一万円

【申込先】北海道ポーランド文化協会事務局

(住所)札幌市中央区北二条西二丁目

(電話)二二二一八六七二

※ハガキか電話で、八月末日までにお申し込みください。  
詳しくは事務局か藤原(電話八九四一〇五七〇)まで  
お問い合わせください。

# ポーランド・クロニクル

一九八八年七月〜一九八九年六月

〈作成〉 伊 東 孝 之

(一九八九年六月二十六日)

## 一九八八年

### 【七月】

七月十二日

◆バルチコフスキ国家評議会副議長、記者会見で「ポーランドに新しい政党が誕生する可能性がある、それはおそらくキリスト教民主主義政党的な形になる」と語る。

七月十七日

◆ポーランドの従軍司祭がカティンでミサを行なう。ソ連兵も儀仗兵として参加。ミサの様子は一部、ポランドテレビで放映。

七月十九日

◆西側商業銀行への債務のほぼ全額にあたる九十億ドルについて、返済繰延べと利率引き下げの合意が成立。

七月二十七日

◆『ポリティカ』誌が一九五六年二月のソ連共産党二十回大会における有名なフルシチョフの秘密報告全文をソ連圏で初めて公表。

七月二十九日

◆「連帯」顧問R・ブガイ、カトリ

ック系週刊誌のインタビューに答え、六〇%ものインフレと市場不均衡の下で、市場経済導入による経済改革を目指す政策は容認し難いと語る。

### 【八月】

八月二日

◆戒厳令以来活動を停止されていたポーランド・ペンクラブが総会招集を許可される。

八月八日

◆低地シロンスクのルンダで公認労組(全国労組評議会OPZZ)がストライキを呼びかけ、「連帯」が労働環境の安全確保を疎かにしているという理由で反対。ストは結局不発に終わる。

八月十五日

◆「七月宣言」鉱山(ハヤストシエンベ)で、労働者五百名が「連帯」労組の復活を含む二十一項目の要求を掲げてストライキを宣言。

八月十七日

◆ストライキがカトヴィツェ県の他の鉱山に波及。

八月二十日

◆全国労働組合協議会、臨時国会の召集を呼掛け。

八月二十五〜二十八日

◆反対派の平和団体「自由と平和」が呼びかけた国際人権会議がクラクフで開幕。参加者一千名のうち、外国からの参加者が二百名以上。

八月二十七日

◆キシチャク内相、「円卓会議」の開催を提案。

八月二十七〜二十八日

◆党八中総で、「円卓会議」案を承認。選挙法改正、二院制、大統領制などを検討。ヤルゼルスキ第一書記は「われわれは国民のほんの一部に過ぎない。：：幾たびか歴史的な重大決定を下してきたが、われわれ古参党員はその決定が歴史の試練に勝てなかったことを知っている」と述べる。

八月三十一日

◆キシチャクワレサ会談。ワレサ、スト中止アピールを決定。

### 【九月】

九月初旬

◆合法誌「対決」(国民再生愛国戦線機関誌)が戒厳令後はじめてワレサのインタビューを掲載。

◆政府世論調査センター、国民の三分の二が政府罷免に賛成していることを確認。

九月一日

◆ワレサのアピールを受け、グダンスクのストライキ終結。

九月三日

◆「七月宣言」鉱山、ストライキ終結宣言。

◆政府スポークスマン、「円卓会議」は九月下旬に開かれようとする。

九月七日

◆全国労組協議会(OPZZ)、政府不信任を表明。しかし「連帯」合法化には反対。

九月九〜十日

◆非合法の独立学生連盟(NZS)、全国大会を開く。

九月十日

◆「連帯」全国執行委員会拡大会議、当局との対話におけるワレサ支持を表明。

九月十六日

◆キシチャクワレサ拡大会談、「円卓会議」の十月開催を決定。

九月十九日

◆国会開会、政府批判発言が相次ぐ。メスネル政府崩壊。

◆ポーランド・ペンクラブが七年ぶりで総会を開く。

九月二十六日

◆共産党九中総ラコフスキ政治局員的首相候補指名を発表。

九月二十七日

◆国会、ラコフスキを首相に選出。ラコフスキは「従来よりも幅広い基礎をもつ政府」を作るため、二週間

の猶予を求める。以後精力的に分野の指導者と会談を行なう。四人の反対派の入閣を求めたが、協力が得られなかった。

## 【十月】

十月五日

◆政治的経済的多元主義と労働組合の複数制を支持する独立政治グループ「ジェカーニャ」が登録を受理される。

十月十三～十四日

◆ラコフスキ内閣発足。

十月十八日

◆「円卓」会議開催できず。政府側は反対派がクローンとミフニクの参加、「連帯」労組の合法化を要求したことが原因と発表。

十月二十日

◆ラコフスキ新首相、モスクワを訪問し、ゴルバチョフらソ連指導者と会談。

十月二十六日

◆党政治局、「円卓会議」早期開催の意思を確認。

十月二十六日

◆ヤルゼルスキ、首座大司教グレンプと会談。

十月二十七日

◆結社の自由を認めた団体法草案を発表、公開討論開始（草案は政府側と教会側の代表者からなる委員会が作成、意見が対立した箇所は両案を

併記）。

十月二十九日

◆ラコフスキ、グダンスクのレーニン造船所など赤字に陥った一連の大事業所の閉鎖を発表。

## 【十一月】

十一月二日

◆ワレサ、レーニン造船所の閉鎖に反対声明。

◆サッチャー英首相、ポーランドを訪問。イギリスの首相として初めての公式訪問。大歓迎を受ける。ただし、共同声明や信用供与などは一切なかった。

十一月十三日

◆政府世論調査センター、ラコフスキ政府支持率を調査（七十二・四％）。

十一月四日

◆サッチャー英首相、ワレサと会見後、帰国の途につく。

十一月八日

◆政府スポークスマン、「連帯」抜き「円卓会議」は考えられない、と語る。

◆グダンスクの一部造船労働者が閉鎖に抗議してストライキに入る。ワレサが中止を勧告。翌日スト中止。

十一月十五日

◆全国労組評議会議長ミョドヴィチがワレサにテレビ討論を申し込む。ワレサ、承諾。

十一月二十一日

◆政府、経済計画委員会に代えて中央計画局を設置する案を発表（一九四八年までの体制への復帰）。

十一月二十三日

◆外務省、チェコスロバキア領事部長を呼んでポーランドからの入国者の審査強化に抗議。

十一月二十四日

◆ラコフスキ首相、オーストリア訪問。

十一月三十日

◆全国労組評議会議長ミョドヴィチとワレサのテレビ討論（七八％の視聴率）、政府側はワレサが柔軟な態度を示したので「円卓会議」への道が開かれたと評価。

## 【十二月】

十二月二日

◆チェコスロバキアが消費物資の国外持ち出しを禁じる新関税規則を実施、ポーランド人旅行者が購入品を国境で没収されるケースが続出。外務省はチェコスロバキア大使を呼んで説明を求める。

十二月五日

◆ラコフスキ首相が日帰りで東独を訪問。

十二月九日

◆ワレサ、フランス大統領の招きでサハロフとともに世界人権宣言四十年記念式典に参列するためパリに到着。ワレサにとって成厳令以後初

めての国外旅行（十二月十三日）。

◆国営通信社が、通信省は盗聴を認める条項を廃止したと伝える。

十二月十八日

◆「連帯」、「円卓会議」に向けて市民委員会を結成。

◆グダンスクで元「連帯」副議長グヴィヤズグを先頭とする急進派が「連帯」全国委員会行動グループ（反ワレサ派）を結成、「労働者の利益防衛に専念しよう」という指導部批判文書を発表。

十二月二十～二十一日

◆党十中総前半会議、政治局員、書記局員の大幅入れ替えを発表。

十二月二十二～二十三日

◆国会が国有、組合有、私有企業の平等と営業の自由を認めた営業法、外資の活動の自由を認めた外資法を採択（一月一日実施）。

## 一九八九年

## 【一月】

一月一日

◆新しい旅券法が施行される。一定期間、全世界に対して有効で（期間の長さは料金次第）、自宅に保管できるようになる（以前は帰国すると官庁に戻さなければならなかった）。

一月三日

◆シヴィツキ国防相が軍備削減を発表。国防費の実質四％削減、兵力で



は一万五千人、国家予算の割合では七・七%から五・五%へ、国民所得の割合では三・八%から三・六%へ。

◆テレビ放送、一九八八年だけで医学部の年間卒業生総数よりも多い二千五百人の医師が国外に流出したと伝える。

一月四日

◆ラコフスキ首相、「ブランド元西独首相の誕生日出席のため」私的に西独を訪問。

一月十三日

◆ワイグ監督、カティン事件を主題にしたドキュメンタリー映画の制作に着手したと語る。

一月十五日

◆ワレサ、翌日から開催予定の党十中総後半部が「連帯」の将来について大胆な決断を下すように訴える。

一月十六日

◆党十中総後半部会議、ヤルゼルスキ指導部に対する信任投票を実施、「政治的多元主義と労組複数主義についての見解」を採択。

一月二十日

◆ワレサ、党十中総を評価する発言。

◆ツイランケヴィチ元首相が死去（七十七才）。

一月二十二日

◆「連帯」全国執行委員会が党十中総見解を歓迎し、早急の交渉開始を主張。

◆ポーランド「緑の党」発足。  
一月二十六日～二十七日

◆全国労組評議会、党十中総決議を批判。

## 【二月】

二月二～四日

◆理論リイデオロギー問題に関する第三回党協議会開催。

二月六日

◆「円卓会議」開催。五十七名の参加者のなかには、クローン、ミフニクも含まれる。三つの作業部会（経済・社会政策、労組複数主義、政治改革）、多くの小部会（法・裁判所改革、エコロジー、青年、マスメディア、鉱業、農業、健康、結社・地域自主管理、科学・教育・技術革新、住宅政策など）、作業班（賃金・所得指標、保健従事者自主管理、自主管理・所有形態、結社など）を設置。それぞれについて「政府連合」側と「反対派連帯」側の共同議長をおく。また記者会見も「政府連合」側と「反対派連帯」側が別々のスポークスマンを立てて行なう。

二月一十四日

◆ラコフスキ首相訪仏（一十七日）。

二月十六日

◆公認の国民再生愛国運動（PRON）機関誌『オドロゼニエ』が、カティン事件についてのソ連犯行説を証拠だてる文書として英国に保管されていたポーランド赤十字の調査報告書を公表。これは外交史家のW・

T・コヴァルスキが英外交文書館で発見したもの。ソ連はポーランド間では、一九八七年五月に合同歴史家委員会が設置され、委員会の発表があるまで相互の了解なしには事件に関連する文書は公表しないことになっていた。今回の文書はソ連の了解なしに公表された可能性がある。

## 【三月】

三月一日

◆この日から、東京江東区のベササン・ピットで、ポーランドの映画監督アンジェイ・ワイグの演出による「ナスターシャ」が上演される。これはドストエフスキの「白痴」から題材をとったもので、玉三郎がムイッシュキンとナスターシャ・フィリップゾフナの二役を演じる。

三月二日

◆ワイグ、ポーランドのクラクフに「日本美術センター」設立を呼びかけ、自ら基金を寄贈する。

三月三日

◆ポーランドが東欧諸国の中で最初に戦車連隊二、ミサイル旅団一などの軍備縮小に着手する。

三月五日

◆ワレサ、グダンスクで記者会見。「当局はかつてなく合意と改革の決意をしている。：：反対派は権力をとりたいたいと思ってもその備えがない」と語る。

三月七日

◆キシチャクワレサ会談、三月二十日までに作業を終え、四月三日に総会を開くことで合意。

三月八日

◆一九六八年の三月事件を記念する学生デモ。ワルシャワで郵便局のストライキ。

三月九日

◆政治改革問題部会、選挙法、第二院、大統領選出方法について大筋合意。

三月十七日

◆「反対派連帯」側のスポークスマン、オニシケヴィチは、政府が「円卓会議」を先取りして選挙法案、憲法改正案を国会の審議に委ねたのは審議違反であり、「円卓会議」は深刻な危機に瀕していると語る。

◆ラコフスキ首相、イラク、クウェートを訪問（一二十二日）。

三月十九日

◆「連帯」の合法化決着。青年問題でも最終合意。党は青年組織の独占権を放棄。

◆「反対派連帯」側を代表するW・フラシニェク労組複数主義問題共同議長が、「今までに達成されたことは一九八〇年八月の二十一項目要求と比べて疑いもなく進歩」と語る。

◆閣僚会議が一九四六～四九年のW・アンデルス將軍（第二次大戦中に在ソ・ポーランド軍を率いて中東に撤退し、西部戦線で戦った反ソ的な

軍人)、S・ミコワイチク(第二次大戦中亡命政府首相、戦後挙国一致政府副首相、一九四七年に亡命)の市民権剥奪措置を撤回する決定を行なう。

三月二十八日

◆ベルギー首相W・マルテンス来訪(三十一日)。

三月二十九日

◆キシチャクワレサ拡大大会談(クローン、ミフニクも加わる)、四月五日に「円卓会議」終了で合意?

三月三十日

◆「円卓会議」、物価=賃金連動制、大統領の議会解散権・法案拒否権などの問題で意見が対立。「反対派連帯」側のA・ミフニクが「状況は深刻」と語る。

三月三十一日

◆党十一中総、五月四、五日に代議院全国大会開催を決定。

## 【四月】

四月三日

◆全国労組協議会執行委員会が厳密な物価=賃金連動制の実施を要求する声明を発表、「政府=連合」側と「反対派連帯」側との妥協に反対。

四月四日

◆三作業部会が作業を終える。しかし、連動制問題での対立はなお解消されず。

四月五日

◆「円卓会議」閉幕式。「円卓会議」の提唱者、キシチャクとワレサの演説のあと、アルファベット順に政党、労組の代表者が演説することになっていたが、全国労組協議会議長のミヨドヴィチが三番目に演説をする権利を主張して一時紛糾する。政治改革、社会経済政策・システム改革、労組複数主義の三点に関する合意文書を採択する。主な合意点は、

①「連帯」、「農民連帯」、独立学生連盟(NZS)の合法化。

②次回の国会(下院)選挙(六月)で、政府側諸勢力に六〇%、教会に五%、一般市民団体に三五%を割り当てる。有権者三千人以上の推薦で誰でも立候補できる。候補者の事前選抜を廃止。次々回選挙では、さらに民意が反映されるように改める。

③上院を新設し、六月に選挙する。各県から二名(ワルシャワ地区とカトヴィツェ地区からだけは三名)、合計九十八名選出。事前に議席配分せず、自由選挙とする。人権、法律の公正な適用、社会、経済問題などを上院の主要任務とする。

④新たに選出される議会で民主的な新憲法、新選挙法を制定。

⑤憲法改正に伴い、大統領制を導入。大統領は上下院で選任。任期六年。国家と行政府の長として広範な権限をもつ。法案差し戻し権、下院解散権、三カ月に限り非常事態を宣言する権限など。

⑥結社の自由、言論の自由、国家機関の責任者の民主的な任命、司法の独立、地方行政の民主化に向けて努力する。

四月七日

◆国会が「円卓会議」の決定にしたがって上院と大統領制導入に伴う憲法改正案、選挙法改正案、団体法改正案、労組法改正案などを可決。

四月十三日

◆国会の上院と下院の選挙が六月四日に決定。

◆ヤルゼルスキーグレンプ会談。

四月十五日

◆農産物の生産者価格を自由化。

四月十七日

◆下院の議席配分決まる。総議席四六〇、うち指導者の指定席三五、残りの四二五のうち、共産党一五七、統一農民党六七、民主党二四(以上政府陣営)、カトリック諸派一六、在野勢力一六一(三五%)。共産党の議席は現在五三%であるが、この改正によって四割以下に減少する見込み。

◆「連帯」、七年ぶりに合法化。ワルシャワ地裁が登録受理。

◆米國、自由化路線に好感して十億ドルを支援。

四月十八日

◆七年半ぶりにヤルゼルスキーワレサ会談。ヤルゼルスキー、会談は象徴的な意味をもつものだと語る。

四月二十日

◆農民「連帯」も再合法化される。

◆ローマを訪問中のワレサ、法王ヨハンパウロ二世と会見、その支持に感謝する。

四月二十六日

◆政府、カトリック教会に法的地位を回復する法案を国会に上程する。一九五〇年に法人格を奪われた際に没収された施設、財産も返還される予定。

四月二十八日

◆モスクワを訪問したヤルゼルスキーは、ゴルバチョフとの間で、カティン事件などのポーランド人連帯の空白問題について資料を公表することと合意する。

四月末

◆党内の保守派の機関誌「現実(Rzeczniosc)」が発行を停止。理由は赤字経営。他方で、戒厳令施行以来、一貫して発行されてきた事実上の反対派の機関誌「週間マゾフスキ(Tygodnik Mazowski)」(非合法誌)も四月末をもって発行を停止した。理由はその使命を果たしおえたこと。

## 【五月】

五月三日

◆「連帯」市民委員会の合法日刊紙「選挙新聞(Gazeta Wyborcza)」第一号が出る。発行部数五〇万。

五月十日

◆立候補を締め切る。上院一〇〇議席に対して共産党一八六、統一農民党九〇、民主党六九、カトリック各派一九、反対派二二（うち「連帯」市民委員会一〇〇）の候補者をそれぞれ立てた。

五月十一日

◆党機関紙『トリブナ・ルドゥ』、スターリン時代の党指導者をきびしく批判する党中総決議を発表。ピエルト大統領時代には不当逮捕、拷問、でっち上げ裁判など多くの犯罪があり、公安当局による迫害が行なわれたと認める。

五月中旬

◆世論調査センターの発表によれば、投票について回答者のうち四八％がする、三四％がおそらくする、九％がおそらくしない、八％が絶対しないと答える。

五月二十一日

◆「連帯」時代の党第一書記カーニャはボズナンの雑誌『フプロスト』に「七年の沈黙のあとで私は歴史の審判を恐れない」というインタビュー記事を書き、一九八〇～八一年にソ連が真剣に軍事介入を考えていたことを明らかにする。

五月二十三日

◆ワルシャワ地裁、『独立学生同盟（NZS）』の登録申請を却下する。学生のデモとスト。

五月二十四日

◆ポーランドがソウルに貿易事務所

を開設する。

◆ソ連・ポーランド歴史家合同委員会は、両国関係史における空白問題についてコミニュケを発表。独ソ不可侵条約の付属秘密議定書について言及、カティン事件についてはなお結論を出さず。

五月二十九日

◆カトリック教会系の議員が国会に妊娠中絶禁止法案を提出する。それによれば、妊娠を中絶した女性は禁固三年、これを助した医師は禁固二年までの罰を受ける。共産党は乗り気でないが、円卓会議の際に借りがあるので、正面から反対できない。『連帯』は選挙に忙しく態度表明を避けている。若者、婦人団体が激しく反対、ワルシャワ大司教館の前でデモを繰り広げ、「赤（共産党）と黒（教会）の独裁反対と叫ぶ」。

五月三十日

◆政府報道官は投票率について楽観的な見通しを語る。最新の世論調査によれば、投票について回答者の五二％がする、三〇％がおそらくする、七％が絶対しないと答える。また政党支持について五一％が「投票するが、どの政党に投ずるかは決めていない」、七％が「『連帯』の推薦のない候補はすべてリストから消す」、一・四％が「『連帯』と関係のある候補者はすべてリストから消す」と答える。

五月三十一日

◆この日閉め切った『ポリテイカ』誌のアンケート調査によれば、選挙の投票率は七六・五％、上院一〇〇議席のうち政府連合側が三二、野党「連帯」側が五五、その他の無党派が一三を、下院の無党派に割り当てられた一六一議席（三五％）のうち野党「連帯」側が一二〇、他の無党派が四一をそれぞれ獲得すると予想された。

## 【六月】

六月二日

◆ヤルゼルスキ国家評議会議長は突然テレビ演説を行ない、選挙後の大連立の可能性を示唆する。

◆「週間連帯（Tygodnik Solidarnosc）」復刊第一号出る。

六月四日

◆総選挙第一回投票日。投票率は予想外に低く、六二・一％。ウッチ市がもっとも低く五五％弱、レシノ、ジェシユフ市などが高く七〇％強。

六月八日

◆選管発表によれば、第一回投票で、野党「連帯」側が無党派に割り当てられた下院一六一議席のうち一六〇を、また上院一〇〇議席のうち九二を獲得。これに対して政府連合側は大多数の候補者が投票数の五〇％というハードルを越えられず、わずかに五人の当選者を出したにとどまり、

上院では全員落選した。しかし、もっとも衝撃的だったのは指定席の候補者三五人のうち三三人（いずれも政府と党の最重要指導者）までが五〇％のハードルを越えられず、落選してしまっただけである。

六月九日

◆ヤルゼルスキ議長がベルギー、イギリスを訪問（十一日）。

六月十三日

◆ラコフスキ首相、キシチャク内相ら落選した三三人は議席を断念すると発表。ラコフスキは心臓病で入院したと伝えられる。

六月十四日

◆ミッテラン仏大統領がポーランドを訪問（十六日）、経済協力を約束。

六月十八日

◆総選挙第二回投票日

六月十九日

◆選管発表によれば、下院で「連帯」市民委員会が取り残した一議席を獲得、また上院でも残りの八議席のうち七議席を獲得。上院の残りの一議席は独立派が獲得して、政府与党側は文字どおり全滅した。政府与党派の枠では、多くの大物が自派の無名候補相手に苦戦し、政治局員のうち当選したのは二人、また閣僚のうちやはり二人という惨憺たる結果に終わった。一般的には改革派が進出し、公認労組（OPZZ）関係者が落選したのが目だった。

六月二十一日

◆オジエホフスキ党政政治局員が統一

労働者党（共産党）を解散し、新しい党を醸成させる可能性を示唆する。

## スラブ研究センターに

### トマシエフスキ教授

一九八九〜九〇年度の北海道大学スラブ研究センター外国人研究員として、ワルシャワ大学のイエージ・トマシエフスキ教授が札幌に長期逗留されます。トマシエフスキ教授は

一九三〇年ラドムスコ生まれ、ワルシャワ中央統計大学を卒業後、同大学、ワルシャワ農業大学、ワルシャワ大学などに勤務され、現在ワルシャワ大学政治学・新聞学部教授です。経済史、民族問題、ポーランド・ブルガリア・チェコスロバキア・ベロルシア・ウクライナ近現代史について著書、論文多数があります。トマシエフスキ教授はまた著名な論壇人で、『ポリテイカ』誌などにしばしば寄稿しておられます。

ドイツ語、ロシア語、フランス語、英語、ブルガリア語を話されますが、残念ながら日本語は話せないということです。夫妻で来日されますが、奥さんのゾフィアさんは美術の専門家、自ら画筆をとって油絵を描か

れます。五月二六日に来日され、札幌に一九八九年三月末日まで滞在されます。会員の皆様の暖かい歓迎を期待します。

連絡先は次の通りです。自宅は、〒〇〇一札幌市北区北二四条西一二丁目北海道大学外国人宿舎三〇四号、電話七一六一八八八六。大学は、〒〇六〇札幌市北区北九条西七丁目北海道大学スラブ研究センター五二七号室、電話七一六一二一一一内線三六三〇。

### おことわり

前号でウッチ市のポーランド・日本協会主催の「日本文化週間」プログラムを掲載すると予告いたしました。が、紙面の都合により次号に掲載させていただきます。

## ポ文協例会（第六回）

### ポーランドにおける選挙

#### ー今後の見通しー

●最近おこなわれたポーランドの総選挙は、自主管理労組「連帯」の圧勝に終わりました。激動が予想される今後のポーランド情勢を、最近来日したばかりのトマシエフスキ氏に分析してもらいます。

【日時】 一九八九年七月二十二日（土）午後二時より

【場所】 札幌国際交流プラザ三階会議室  
（中央区北一条西三丁目 札幌MNBビル）

（入場無料）

【講師】 イエージ・トマシエフスキ  
（ワルシャワ大学政治学・新聞学部教授）

【後援】 札幌国際交流プラザ

※講演はポーランド語で行われますが、北大スラブ研の伊東が簡易通訳をつとめる予定です。質疑応答の機会もあります。非会員の方も誘い合わせの上、ご来臨ください。詳しくは本協会事務局、または伊東（電話七一六一二一一一内線三一五八）までお問合わせください。

## POLE 第 7 号(1989.7.4)目次

霜田千代磨「我が心のポーランド」	1
〈第 7 回例会〉「ポーランドの演劇(仮題)」(講演:ヤドヴィガ・ロドヴィチ、1989.8.26)のお知らせ	2
〈第 8 回例会〉「ポーランド映画の世界」②プルス原作・ハス監督『人形』上映会(1989.9.30)のお知らせ	3
イエジー・トマシェフスキ「札幌滞在～最初の一週間」	4
伊東孝之「総選挙で《連帯》市民委員会圧勝」	5
大井清美「ポーランド語講習会に参加して」、クシシュトフ・ヤブウォンスキ・ピアリサイタル(1989.7.7)、第 2 期「楽しく学ぶポーランド語」講習会(1989.9.5～)のお知らせ	6
伊東孝之「ポーランド・クロニクル 1988.7～1989.6」	7
スラブ研究センター研究員としてトマシェフスキ教授が札幌滞在、〈第 6 回例会〉「ポーランドにおける選挙～今後の見通し」(講演:イエジー・トマシェフスキ、1988.7.22)のお知らせ	12